



第7號

月1回發行

ひの心を繼ぐ會

〒791-0510

住所:愛媛縣西條市
丹原町丹原 50-1

綱 領

- 一 私達は明德を明らかにします
- 一 私達は國家の鎮護となります
- 一 私達は大和世界を建設します

神道(三) (大和世界の建設)

古事記 はじめに(三)

ただ純粹に—直日もちて— 小雨降る霧島

竹葉 秀雄

あれはいつの頃だったか。今明らかでないが、三十歳前後であつたと思ふ。當時、古事記について「日本道」に書いてゐた私は、日向の地を探ねたことがあつた。先づ宮崎神宮に参り、鶴戸神社に詣で、鹿兒島に西郷隆盛などの遺跡を尋ね、照國神社にお参りしてから、再び日向にかへつて西都原に、邇邇藝能命と木花之佐久夜卑賣の物語を偲んで、霧島神宮に詣でたのであつた。小雨が降つてゐた。若葉の頃であつた。直ちに高千穂の峰に登らうとしてゐたところへ、紫の衣をまとはれた宮司が降りて見えられたので御辭儀をすると、その宮司は近寄つて言はれた。「今、神前に額づくつと、神のお告がありました。今日話す人が見えるとのことでした。その人が貴方のやうです。」私が高千穂に登る考へであることを言ふと、それは後にして、是非今日は私の話を聞いて下さい。と強く言はれるので、私も神のお告との事ではあるし、心動かされて、宮司さんの後に随ひ、すすめられるままに客間に坐したのであつた。更めて名を名乗つて挨拶をすると、宮司も名刺を出された。見ると「卜部眞一」と書かれてあつた。

「貴方は、古事記を讀んでゐられるらしいが、古事記を、支那の

思想でみたり、西洋の哲學で考へたりするのでは本當ではありません。貴方にお観せするものがあります。」

「私が、照國神社の宮司をしてゐた時、鹿兒島の有志と相談し、東京から靈能者(今名を忘れてゐる。)を呼び、名士の方々に集つていただき撮つたものです。寫眞の種版を十枚重ねて、集つた人々に何枚目かの種版を定めて、それに自分の思ふ人を念じて下さいとの事で、皆が各々念じたのでした。暫くして、もうよろしいでせうと、それを、市内から呼んでゐた寫眞屋に現像させたのですが、やがて、その寫眞屋が暗室から聲をあげて、「出てゐます。出てゐます。」と言ふのです。持つて來たものを見ると、西郷隆盛、島津齊彬、などの、これがその寫眞です。」

見ると、西郷隆盛など、想像畫などに似てゐられる。

「これが零界にいられるお姿です。靈魂の世界にも色々の段階があつて、高級の靈は白色から金色に輝いてゐられてなかなか逢うことが出来ません。普通幽靈が出ると言はれるその様な靈は、この世に執念をもつてゐる靈で撮り易いのです。これは乃木將軍が福井かどこかあたらの方の聯隊に赴任せられた時、幽靈が出ると言つて皆逃げ出す屋敷があつたのですが、今度來た青年將校をその屋敷に入れてみやうではないかとたくまはれて入られた屋敷に出た幽靈です。」

「その靈能者は、自分の魂を遊離して、皆の指定される所に行つて、その様子を見てきます。と言ふので、中の一人が何町の何丁目にある私の家の二階の様子を見てきてくださいと言ふと、靈魂の遊離状態になつて、やがてもとにかへつ

て言ふのに、すぐその家の隣の病院に人をやつて見て下さい。言はれた家の二階を上つていくと、その階段の窓から見えた病室の人の體から同じ姿の靈體や遊離してゐたから、死なれたものと思ふ。確かめて下さい。二階の部屋は締つてゐました。中の様子は見えないで、病室の人のことがあつたのですぐ引返してきました。と言ふので連絡してみると、話の通り死んでゐました。この鉢の寫眞は、密閉した室から靈力によつて取り出したものです。机を空中に持ち上げることも出来るのです。」

と、いろいろ語られ、多くの寫眞を見せていただいた。私は、父が戦死した時、父の靈が母に現はれたといふ母の話や、家にゐた女中が、父の死んだ時おきた事象や、英國の詩人で畫家のブレークの畫集に出てゐた、彼が實際に見るといふ庭の樹木に來る天女の畫や、死者から遊離してゐる靈體の畫と彼の詩などを思ひ浮べながら、その寫眞を見、話を聞いた。宮司は言葉を変更して、

「古事記は神靈の書です。他の國の思想や哲學を主にして讀むべきものではありません。書いてあることは事實です。事實として讀まねばなりません。貴方はその出来る人です。どうか、この道にすすんで下さい。」と、説かれるのであつた。私が、古事記と取り組んでゐるのを知つてゐられ、神のお告があつたと言はれ、初めてお會ひしたのに、若い私に、諄諄と時間も惜まづ話して下さいる至情に私も胸が熱くなり、「出来るだけ勉強します。」と深い決意をもつて辭去したのであつた。

其後、私は神靈の問題に全力をもつて入つたとは謂へない。常に心に存り、それに關する書物や記事などに注意は拂ひながらも、格別に、それらの權威者について學ぶにはゐたつてゐない。然し、數は少ないけれども私は、否定出来ない靈魂の體驗をしてきてゐる。卜部眞一大人は、若い時代の私の前に忽然と現はれたお方であつたが、私に大きな教示を與えて下さつた。私は、今もその御指示通りに古事記を觀てゐるのである。卜部眞一大人は、その後、淡路の伊弉諾神宮に奉仕せられ、後、宮内省に入られたとも聞いてゐるが、最近の御様子はわからないままでゐる。(以下次號)

第一章

農の哲學的考察

第三節 農本生活 第一項 農本の意義

菅原 兵治

農は實に歸質の力を有するものである。それは何故かといへば、「農」それ自體が、「質」を其の本性とするからである。而して此の質のことを、また「本」といふのである。此の事は第一節の陰陽文質の原理が解さるれば容易に肯かれることであらうと思ふ。即ち「質」は地中に潜む根であり、若しくは種子であり、之に對して「文」は地上に茂る枝葉であり、其の最も尖端的なのが花である。

かくて質は本であり、文は末であり、隨つて東洋古來の「農は國の本なり」といふ思想は、「農は質なり」といふ意義を有するものであることが解し得られるであらう。「農本」といふ思想に對する從來の解釋が、ともすれば明瞭を缺いてゐたが、私は「農は質の本姓を有し、従つて歸質の力を有す。」といふ意味に取るべきであると思ふ。かういふ見地より左に農本生活に就いて述べることとする。

自然に春秋の陰陽文質循環の大法則が行はれるが如く、人の世にも亦此の大法則の運行がある。

人間の世界に於ては地上に絢爛けんらんとして咲誇る花に該當するものが、即ち都市商工文明であり、地中に深く潜む根に該當するものが、即ち農本文明である。天地自然に春夏秋冬の陰陽の大きいなる律動が存するが如く、人の世にも亦この都市商工文明と農本文明との大きいなる交替律動の波がうねつて居る。斯ういふ見地から過去三千年の人類の歴史の跡を大觀すれば極めて興味豊かなものがあるが、之を枚擧するの煩を避けて、最も手近かな明治以後の我が日本の歴史的過程に於て之を見ることとしよう。大體明治の初期から明治の末期大正の初期にかけては、都市商工文明の建設に國を擧げて没頭した時代である。而して又そのことが國家全體から觀て必要でもあつた。あの時代に、然かすることを阻むやうなことがあつたならば、日本の今日の強大は見な

つたであらうと思ふ。さういふ時期に於ては日本農村、日本農民は、この地上の花たる都市商工文明の建設に、根たる農村の貯へて居つた過去の養分を、殆ど使ひ果す迄提供して其の大成に奉仕して來たのである。しかしそれでは農村が疲弊して困るからとか、又は農民だけが困窮に陥るからとかいふ利己主義的心情から拒否するやうな卑怯な農民ではなかつた。

天皇の大御田族たる自覺を高く有つ我が日本農民は、かゝる時に「かくすればかくなるものと知りながら、己むに己まれぬ大和魂」の一徹から、喜んで己れを空しうしても、この必要の爲に奉仕して來たのである。斯くて都市商工文明が明治を經、大正の初期まで順調に發展向上して來た。然るに、時に春あれば秋あるが如くに、又、時代にも大きく一葉落ちて天下の秋を知るべき時が來た。大正八九年かの經濟界の病的昂奮時代ともいふべき好況時代を堺として、日本の政教の全體的動向に轉向を來たしたのである。言換ふれば都市商工文明的なる花が散り葉が枯れて、是等の地上部の養分が、次第に地中の根である農村に還元さるべき時になつたのである。「末」たる商工文明から國の「本」たる農本文明に還るべき時が來たのである。近來農村問題といふ聲が俄かに大きくなつた。政治家も官吏も軍人も、新聞も雜誌も、農村問題農村問題と喧しく絶叫するやうになつたが、此の現象は決して一時的なる勃發現象ではない。造化の法則から觀れば、今述べたやうな大きい陰陽の化に乗じて生じて來た本質的の現象なのである。然し時代の潮流に乗る流行的現象といふものは、ともすれば人間の行爲によつて必要以上に修飾せられ、必要以上に力説せられ、必要以上に宣傳せられて、ともすれば輕薄性を帯び勝ちなものである。農村問題に於ても亦其の傾向が極めて大であつて、最近の農村対策は、餘りにも農村を浮煽し過ぎる憾み（うらみ）がなかつたか。是では、折角地中に潜む質實なる根——本であるべき農村を、何時しか又地上に一時の美を銜ふ花のやうなものにして行く憾みが多分にあるだらうと思ふ。茲に私共は農は「國の本」である——「本」であるといふことは「末」ではない。——枝葉ではない。——一時の美を誇る所の花ではない。——深く地中に潜んで「質」（實）として永遠なる生命を胎藏する根本であるといふ意味であるが。

——此の意味に於て「國の本」であるべき農村生活、農道生活といふものに就いて、改めて眞剣に反省をすることが必要になつて來たのである。

猶此處で私は農本思想と重農主義思想とに就いて一言して置きたいと思ふ。東洋に於ける農本思想と西洋に於ける重農主義思想とは、必ずしも其の軌を一にするものではない。重農主義は、重商工主義に對する主張である。或る國の或る時代を取つて見れば、或は重農政策をとらねばならぬ時もあるであらうし、或は重商工政策をとらねばならぬ時もあるであらう。吾國に就いて之を見るも明治維新以後大正時代までは大體重商工時代と謂ひ得べき時代であつた。其の行き過ぎが昭和時代になつて俄然として農村問題の擡頭となり、重農時代の曙光（しやうこう）を見るやうになつたのである。斯くの如く重農とか重商とかいふ主張は政教の重點の時代的推移變遷を意味する語である。

之に對して「農本」といふ語は「商末」に對する語である。「農は本なり、商は末なり」といふのは、決して農のみを重んじて、商を輕んずるといふ輕重關係とは全然其の思想の根柢を異にする。時代的に見れば農を重んずる時代もあらう。又、農を輕んずる時代もあらう。然し農を重んずると輕んずるとの別無く、常に農は「本」の原理に立つべきもの、商は「末」の原理に立つべきものといふ職業の本質を示したものである。故に要言すれば、重農とか重商とかいふ考へ方は政教の重點推移の時代的考察の問題であり、農本とか商末とかいふ考へ方は、其の本質的考察の問題である。農は時に重んぜらるゝと重んぜられざるとの時代的差異あるも、常に「本」の原理に立つべきものであるといふのが「農本」の本義である。かゝる意味より東洋に於ては古來農を本業といひ、商を末業といふてゐる。（後出呂氏春秋上農篇等参照）

古人の金言を靜思す②

三浦 夏南

學びて時に之を習ふ

子曰、學而時習之、不亦說乎。

有朋自遠方來、不亦樂乎。

人不知而不愠。不亦君子乎。(學而第一第一章)

子曰く、學びて時に之を習ふ、亦說(よろこ)ばしからずや。

朋有り遠方より來る、亦樂しからずや。

人知らずして愠(いか)らず。亦君子ならずや。

朱子は學(がく)而篇を首篇と稱してゐる。首篇の「首」とは「初」の字と違い、その篇を重んずる含みがあると崎門學(きもんがく)の大家淺見綱齋先生(あさみけいさい)は論語講義の中で指摘して居られる。論語前篇全章一つとして缺(か)くべからざる金言であるが、とりわけ學而首篇は全篇を讀んで行く根本として深く拜さねばならぬ重要な篇である。『朱子語類』にも「今、論語を讀むには、且く學而の一篇を熟讀せよ。若し一篇を明かにし得ば、其餘は自然に曉り易し。」とあるを見ても明らかである。

さらに朱子はこの篇本を務(つと)むるの意多しと言ひ、この篇を「本を務る」の觀點から見て行かねばならぬことも示唆してゐる。孔子の語る言葉のどこに本があり、何が末であるかを確認し、その本に力を用ゐて止むことがなければ、自づから末も整つて來る。前號でも書いたが、人はとかく末に走り、結果ばかりを求め易い。しかしながら、眞に結果を求むるならば、深く根本を培養することに努めることが先決であり、肝要である。また人は得てして理想の聖人像に憧れるばかりで、如何にしてそこに辿りつくかの具體的方法の探究に疎(うと)い。どこから手を付けて、どこへ至るかが明確でなければ、人生長くとも百年の命、努力する手がかりすら掴めぬこととなる。本を明かにし、本を

務(つと)むることは今に努力すべき我々にとつて、最も先に知るべきことである。

これらのことを踏まへて本文を見て行く。先づ學について。朱子は學を「效」と「覺」の二字で説明してゐる。效とは眞似するといふ意味であり、覺とは自らの内に覺るといふ意味である。つまり學ぶとは、天地の道を體得した聖人の眞似をし、自らの内に聖人と同じ明德が存することを悟ることである。ここで朱子は學の説明についても先述の「本」の視點から説いてゐることが分かる。人が神より授かりし性は本來善であり、明德であるが、それを現實具體に我が身に體現して行く爲には先覺者に學ぶことが先決であり、必要不可欠である。そしてその努力が積み重なれば、明德を自らの内側に感ずることができるのである。

次に習ふの解説であるが、「習ふ」の字は幼い鳥が飛べるまで繰り返して繰り返して習ふ(な)むる様子を描いた字である。鳥は飛べなければ鳥として生きて行くことが出来ない。その鳥の如く人も人としての道を歩み、徳を得なければ眞の意味で生きたことにならない。つまり學んで止まざることを鳥に譬へたものである。素晴らしい譬喩(ひゆ)であると思ふ。學とは先述の通り、學ぶより覺るにまで至らねばならぬものであるから、繰り返して習ふ(な)むることを「習」の一字にて表したものである。本を務むとは末に至ることを豫想しての言であり、末に至るまで本を務め續けることを含んでゐる。

説とは悦の意である。説明の説ではなく、悦(えつ)樂の悦である。よろこぶといふ意味である。朱子は「中心喜悅」と言ひ、人に分からねぬ内奥の喜びであると説いてゐる。自得の喜びであり、古典を熟讀するものが、生活の一場面にハツと内に芽生えるところのあの喜びである。これは大きな喜びではあるが、人に説明を以ては傳え難い幽(かす)かなものである。道を學び、學び得たことを幾たびも考へ、生活に行ひ、心に一つの悟りを得た時、喜ばしい氣持ちが内より湧き上がつては來ないかと孔子が弟子に對して親切に問ひかけて居るのが目に浮かぶ。それを表さんがための「説ばしからずや」である。

思ひ返せば、自分が學問にのめり込んだのもこの「説」があつたからこそである。人に傳へたくて仕方がなかつたその喜び。傳え難いその嬉しさこそ

學問の出発点であり、原動力である。論語を紐解くとその巻頭第一番にこの「説ばしからずや」の一言があることを衷心より有難く思ふ。現實に處すれば、事は多端に流れ、ややもすれば多忙さに追われることも屢々であるが、常にこの神聖な喜悅を内に求めることを忘れずにみたいと、本章を拜讀しつつ深く思ふのである。

「説」は「樂」に繋がり、最後には「不愠」の境地に至らねばならぬ。本章第二弾、第三弾と續いて行くが、其は來月號に残して筆を擱きたい。

★活動報告

- ・九月十一日（火）勉強會『農士道』を開催。
- ・九月二十八日（金）勉強會『土居清良』を開催。

★今後の豫定

- ・十月十六日（火）十九時～二十一時 『農士道』
松山市男女共同参畫推進センター☆コムズ三階會議室 一―二
（住所：愛媛縣松山市三番町六丁目四―二〇）
- ・十月三十日（火）十九時～二十一時 『土居清良』
松山市男女共同参畫推進センター☆コムズ三階會議室 一―二
（住所：愛媛縣松山市三番町六丁目四―二〇）

★一燈照隔 萬燈照國

ひの心を繼ぐ會は竹葉秀雄・近藤美佐子兩先生の精神を繼承し、發展させることを目的として生まれた會です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが國を照らす「ひ」になることを願ひ、活動を行つてをります。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますやう、宜しくお願ひ申し上げます。

年會費

- ・一般會員 三千圓
- ・贊助會員 一萬圓
- ・特別贊助會員 三萬圓
- ・支援會員 一萬圓

